

阿片と天皇の植民地／戦争人類学

——学問の対民関係

全 京秀*

訳：山 泰幸**

金 蘭姫**

■要 旨

この論文は植民地時代と戦争時期に遂行された日本の人類学者の民族誌的研究の過程に関する問題提起であり、泉靖一と杉浦健一の現地調査の過程を中心として扱っているものである。彼らはともに、第二次大戦後、東京大学の文化人類学研究室の教授になるが、このことは、彼らに対する学問的評価がそれほど大きく、日本人類学界内での彼らの影響力が小さくはなかったということを示していると思われる。泉靖一のオロチョンとマリノフスキーのトロブリアンドの研究においてなされた贈答の問題に内在している倫理的問題を比較してみると、泉の場合はオロチョンで阿片を、マリノフスキーの場合は tobacco を贈り物として配っている。

泉の報告書では自分が関東軍から渡された阿片をオロチョンに配りながら、オロチョンの人々の生理的問題について心配する記録を残している。この報告書は泉の指導教官である秋葉隆によって詳細に検討されて、『民族学研究』の編集委員会を通して出版される。杉浦健一は1938年に日本軍によりパラオ島に派遣された上、ヤップ島で原住民に天皇や皇道主義を教育した。原住民の天皇に対する理解を高めるため杉浦はヤップの神話を用い、住民に天皇に対して満足すべき理解をさせるうえでの民族学の寄与について論じている。杉浦の事例を、西部アフリカでティブ族を研究する過程で「幽霊」の概念を学んだローラ・ボハンの場合と比較すると、民族学者の作業過程に介在する倫理的問題の程度を把握することができる。

以上のように泉と杉浦の場合は、日本帝国主義が進めていた植民地支配と戦争遂行過程の中で民族学的調査過程の倫理的問題を把握する事例になりうる。人類学者の現地調査に介在する学問の倫理性に関する評価は、人類学史の課題であると言える。

キーワード：フィールド調査、ラポール、植民地主義人類学、戦争人類学、泉靖一、杉浦健一、日本人類学史

*ソウル大校

**関西学院大学

1 序言：ヤヌスの社会科学

私たちの時代に人類が直面している危機状況を集約された単語として一つ選ぼうとすると、私は「破倫」と言いたい。東洋の「四書三経」から教わった倫理の対社会的比重とアリストテレス時代の「ニコマコス倫理学」が担当した社会的重みは、今日の私達が生きる世の中で、これ以上影響力を発揮することはできないことを実感する。二千年という時間が経過するなかで、統制と支配と侵略の集団に転落してきた学問には、もう倫理を論じる体面もなくなった。しかも、社会科学が創造された意図について疑いを持たざるを得ないし、科学と人文に大別された学問構図の中で誕生した社会科学の出現を、学問を装った人類的不幸の大事件と規定せざるを得ない。人文的な人間と社会の現象を、科学的に分析することで、人間の理解のための新たなジャンルを開拓する趣旨をもって出発した社会科学は、人間と社会の統制と支配に関わる、ヤヌスの異なるもう一つの顔を具備していたことを否定することはできない。

植民地時代に政策の道具として名分を維持した社会科学という学問の中に、倫理という単語が当てはまる隙間は極めて微々たるものになった。統制と支配の程度が極に達した戦争状況において、社会科学者の倫理問題が利敵性の試験台上上がった事件は、第一次大戦の直後のアメリカで起きたこともあり [Boas, 1919]、今でもこの問題は至極敏感な部分として残っている [Price, 1998, 2002]。政府の政策や軍事戦略と密接な関係を持ちながら履行された社会科学的な学術行為について、倫理という尺度で対応できなければ、学問、特に社会科学というものは延々と統治と支配の集団という地位に満足するしかない運命に置かれていることを指摘できる。自律性を保障されない学問はもはや真理を論じる資格がないために、社会科学の倫理性に対する問題提起はいくら強調してもし過ぎることはない。かつ社会科学の対社会的／人間的信頼度は、倫理の問題についてどれほど敏感であるか、または倫理性の確保にどれほど寄与しているかによって評価されるだろう。

第二次世界大戦の間、この問題は克明に現れ、戦争と学問の関係は分離不

可能という点が確認されて、学問の倫理性は深刻に検証を受けなければならないという点が明確になった。「人類学的知識が国家に必要で（あり）……人類学が南方建設に役割を希望すること以外に何もない」〔清野，1943：2〕とアピールした大東亜共栄圏の擁護論者である外様人類学者¹⁾の陳述は侵略性のレトリックであることをずいぶん証明している。そして、「戦後ドイツではミュールマン（W. E. Muhlmann）が『人類学者の責任』という論文から専制国家が政治的目的で人類学を利用したことについて警告をしているが、この警告はドイツだけではなく全面戦に介入している全ての国家を対象とした警告だった」〔Proctor, 1988：169〕。

本稿は植民地支配と戦争の渦中で人類学という学問分野に従事していた学者たちの調査活動の過程において必修的に行われた資料収集の行為に関心を集中して、その行為に介入された倫理的な問題について検討してみることを目的としている。いわゆる人類学者たちの資料収集方法として挙げられる深化的研究と参与観察（participant observation）を含んだ野研（field research）が行われる過程から具体的にどのような行為が演行されているのかについて着眼し、植民地時代と戦争期の間の、日本人類学者の活動について微視的論議をしてみたい。

論文の副題として私は“対民関係”という軍事上の作戦用語を借用した。植民地の時期、特に戦争と関わる時期に人類学者たちの活動は軍事上の作戦と密接な関係の中で進められたことを見過ごすことはできない。民族誌を作成するため野研をする人類学者たちは「彼ら自身を一つの社会の中に沈潜させ……研究対象である社会的世界の中に参与している部分的な内部者」〔Brymann, 2001：x〕（傍点筆者追加）という点を想起すると、軍事作戦の延長線上に活動した植民地／戦争期の人類学者たちの基本的姿勢は内部者の地位とは距離を置いた“対民的”すなわち文字どおり民に対してのものだったと言えるだろう。従って、対民の関係を維持した人類学者たちの活動は、軍事上の作戦舞台とある程度具体的な関連性を見せているかという点に留意する必要がある。

「一般的に、ある人の業績を評価する時、それが社会科学の場合には、特

に、それが作られた時代状況、時代思潮を無視して、その業績を完結した宇宙になったものと見なす評価は正当ではない……時代の雰囲気を読み取らないといけないし、時代精神の重圧を感じることでそのような時代状況の中で成し遂げられる業績として……批判されなければならない」〔服部、1974：56〕という見方は本稿の論理展開のプロセスの中で一番重要な点として考慮している。個人研究者の研究業績は時代性を背景としているため、歴史的評価の対象になり得る。しかも、評価対象の業績が専制国家の性格が強い時代の産物こそ個人業績と時代状況との相関関係は綿密に検討しないとイケない。「時代精神の重圧」に顔をそむけた批判軌道は猥褻性の是非を呼び起こすことになる。

2 「私的遭遇」とメタ民族誌

イギリスが生んだ最高峰の社会人類学者であるマリノフスキーが方法論として提示した「原住民の観点 (native's point of view)」〔Malinowski, 1922〕は方法論の論議に渴きを経験してきた人類学界と社会科学界に新鮮な雰囲気を提供した。それは一種の魔力を持っていた。しかしながら、その魔力が大きければ大きいほどその中には神秘化された部分があることを指摘された。「原住民の観点」は自己超越の希望と自己欺瞞の恐怖の間で劇化されるものとシニカルな批判をしたクリフォード・ギアツ (Clifford Geertz) は日記形式の自目型民族誌 (I-witness style ethnography) が野研上の現実を一番よく反映しているものという対案を提示しながら、「私的遭遇としてのフィールドワーク (field work as personal encounter)」と定義している〔Geertz, 1988：84〕(傍点およびイタリック筆者追加)。ギアツの提案は参与観察に対するマリノフスキー式神秘化の最小化を試みたことと理解される。マリノフスキーの観点を基盤としている参与観察とギアツの目撃が成し遂げる共通母は人類学者個人と住民の間で起きる私的遭遇という互惠的な構図である。

目撃から観点に至るまでの人類学者により作られる民族誌作業の過程は、先ず、互惠的な私的遭遇から出発する。私的遭遇という状況でどのような行

為が展開されているかということが、本稿が関心を持つ焦点である。すなわち、人類学という学問から方法論論議の出発に該当される出会いの問題と、その問題の過程から展開される野研と研究対象住民の間で展開される人間的行為の関係が本稿の核心となる問いであり、それが実際に成し遂げられた植民地／戦争期の日本人類学者たちの微視的言行についての分析が本稿の中心的な内容を示している。

人類学者が現地 (field) 及び現地の人間と出会う状況について詳細な記録を残した例はそれほど多くない。人類学者の現地というのは一種の実験室という認識が支配的であって、トロブリアンドの民族誌と彼の日記から再現された劇的顛倒の対比を通して、人類学者の実験室という一種のパノプチコン的に造成された状況という先入観がマリノフスキーにより提示されたという考え方を持ったギアツは、マリノフスキー式の民族誌について“自己欺瞞的恐怖の劇化”という表現を使ったようである。

観察者から強制的に絶縁されたパノプチコン的民族誌の製作は民族誌学者の自己欺瞞であったことは明らかだ。参与観察者と現場の絶縁過程から犠牲になった部分が私的遭遇の場である。言い換えると、私的遭遇を犠牲の羊としてパノプチコン的民族誌の叙述が可能だと思われる。日記が私的なものと勘案すると、ギアツが提案した日記形式の自目型民族誌の製作が志向することは、論文や書籍型の研究物がいわゆる私的領域として隠されていた部分を含めなければならないという提案だと思われる。論文や書籍形態の出版物という、いわゆる公的領域の発明のための作業過程から、私的領域は出版社と編集者、そして人類学者自らによって抹殺され、その抹殺の過程と結果は究極的にリアリティーの損傷をもたらすこととなる。民族誌の作業過程において‘公／私’分離の発明は究極的にリアリティーへの近接を妨害する障壁として作動していることが分かる。

私的遭遇を反映する記録は、多くの場合、身辺雑記として認識された結果、適切な弁明がない状況で出版という公的領域から除外され、民族誌から私的遭遇の脈略が削除されたことは、どういうふうに説明されるべきなのか。出版という行為は著作権を随伴する。出版物を創造した人が創作行為を

保障されるために著作権が働くようにする過程が介入されることで、著者は出版物の内容については一定した権利が働く。出版物の形態として作られた民族誌の内容の元の所有主は誰であるかを問うと、私達は相当複雑な論議をせざるを得ない課題を抱える。

今は民族誌の内容に含まれた知識の所有主を見分ける問題は論外にし、情報源から民族誌に転換される過程で民族誌学者に提供された知識の所有権が、出版と出版に必要な行為である著作をする過程で情報源から著者に移動された点を指摘することができる。私的遭遇で得た情報を知識化し、それを出版という公的な形態に作ることで、情報源の知識は著者である民族誌学者の著作権に属することになり、その過程で私的遭遇の内容である身辺雑記が色々な理由によって（例えば、論文形式と紙面制限など）削除されることがわかる。即ち、私的遭遇の身辺雑記を除去する行為は、公的形態の民族誌製作に陰に陽に役割を果たしていると指摘できる。

民俗知識を提供する情報源と、提供される民俗知識を自分の民族誌に含める民族誌学者の間の関係に介入される双方の行為は一種のエピソードとして扱われることが多い。そのようなエピソードは学術論文や著作に含まれるよりは講演や講義を面白く作るレポーターの役割をすることが多い。深刻な論文の後面部に働く裏話に残る私的遭遇の内容の中では、最も代表的に知られているものがマリノフスキー日記 [Malinowski, 1967] と言えるだろう。それが公的領域に登場する時間は50年もかかった。私的なものが公的なものとして転換されるためには、時間の上での醗酵期間を必要とするようだ。それはパンドラの箱を開けると同じように、人類学的方法論の論議に大きな波紋と共にフィールドワークの倫理性についての問題を提起するところまで至った。

写真を撮ることに、どのようなカメラを使うのか、あるいはどのようなレンズを使うのかによって撮った写真の結果が異なるもののように、人類学者の作業過程で、カメラまたはそのカメラが持っているレンズの役割をする人類学者の思想や観点、あるいは世界観についての理解が必要である。その部分の理解を可能にさせる資料として動員できるものが身辺雑記に該当

される出会いの記録と考えられる。人類学者が民族誌の対象である、あるいは人類学者を含んだフィールド状況についての民族誌、即ち、民族誌の民族誌になるのである。民族誌の行間に隠れている、あるいは出版という形式として現れる公的論文や書籍の後面部で働く部分をメタ民族誌（*meta-ethnography*）と呼ぶことが出来るが、これはギアツが追求している日記形式の自目型民族誌とも相通ずる部分がある。

そういう意味で私はマリノフスキーのトロブリアンド日記を代表的なメタ民族誌としてみなす。1967年、彼の日記が出版されて以来、マリノフスキーに対する評価だけではなく、人類学的方法についての全般的な反省と展望をもった論文や書籍が夥しく出版された。その影響は人類学の核心である民族誌というものの再発明（*reinvention*）を要求することとなった。その時まで民族誌は“参与観察”という曖昧なベールに包まれていたのも確かであって、マリノフスキーの日記の出版はそのベールを外すことであり、かつ社会を研究する人類学者の倫理問題にまでメスを突き付けるに至った。マリノフスキーの日記とそれに関する学界の反応はメタ民族誌に対する関心として集約できる。メタ民族誌に対する論議は、少なくとも人類学分野では人類学的方法論に対する論議を活発にさせ、その議論は究極的に研究の倫理問題についての方向を狙う点で、学問的な意味を十分持っていると考えられる。

メタ民族誌の内容は主に私的遭遇のカテゴリーに入れられる物語として構成され、理論的な論議よりは野研の期間中に住民達と接触する人類学者の身辺雑記に該当するエピソードとして構成されている。理論的議論が欠けた反面、私的遭遇の内容には著者の世界観や人生観、そして個人的趣味や友人関係などが主に登場する。それこそ舞台演出のためのバックグラウンドに当たる物語のため、フィールドの状況を再構成することにおいてはとても重要な役割を果たすことができる。「民族学、人類学などの論文は到底書けない素人」[土方, 1943: 7]と謙遜して自分に言及した土方久功の『流木』は10年間パラオ（Palao）とサタワル（Satawal）島で日記形式の記録を残したもので、ギアツが指摘した自目型民族誌の範疇に包含されるに適切な面を持つ。問題はその記録が見せる民族誌とメタ民族誌の混合性についてどのよう

に解釈するかということだ。学術論文集の論文形式の民族誌に慣れている人には『流木』が日記形式のメタ民族誌として見えるだろうし、マリノフスキーのトロブリアンド日記を基準として見ると『流木』は形式化された民族誌的情報と分析の内容を多く含んだ文章として見えるに違いない。

民族誌は典型化した形式を整えているものではない。民族誌の作成に王道はない。民族誌は映画としても可能な形式であり得るし、叙事詩と漫画としても可能である。この文章で筆者が目指すことはメタ民族誌の可能性という部分である。そこでは民族誌の後面部を提供することで民族誌の内容を一層豊富にする力を持っていることが確認できる。言い換えれば、民族誌を脈絡化する能力を持っているものはメタ民族誌と言えるだろう。マリノフスキーの民族誌の白眉は脈絡である [全, 2001]。ところで、彼のトロブリアンド日記は既に発表された多くのトロブリアンド民族誌の脈絡を一層脈絡化させる機能を果たすのに十分である。こういう点を考慮すると、土方久功の『流木』は脈絡という側面から読まなければならないと思われる。

メタ民族誌が脈絡を脈絡化させる呪力を持っていることを確認することは、民族誌理論の新たな次元を開拓する試みである。民族誌とメタ民族誌の間、互いに鏡の効果の穿鑿が生きざま全体を見せる基盤になり得るし、この過程が民族誌上の自省 (reflexivity) とも言えるだろう。民族誌上、発生するはずの後面部や影の部分がメタ民族誌によって照らされると、従来隠蔽されてきた研究過程の権力問題、即ち研究者と対象の間で造成され得る垂直的位階と隠閉された偽計に対する検証が可能となる。このような試みの方法論上の寄与は倫理問題を射程に入れることになると期待される。言い換えると、人類学的研究過程の倫理問題に対する議論が深層的に進められるためにはメタ民族誌についての分析が必須だと考えられる。

3 トロブリアンドの tobacco とオロチヨンの阿片

3.1 マリノフスキーと tobacco

貨幣経済の支配から自由であるか、または金銭関係が社会的関係に優先し

ないところを訪問する人類学者たちは、たいてい住民のために贈り物を持参する。贈り物は挨拶をする手段となるため、現地を訪れる人類学者は住民に渡す贈り物の選択について深く考えるのが普通である。それは最初に行われる円満な出会いをつくるために最小限度の「油を塗る」(oiling) 役割となる。私的遭遇の現場をサポートする人類学者の贈り物はどのような役割を果たし、その結果はどのように評価されるだろうか。研究者と対象者の間の贈与論である。

人類学者が持参する贈り物はフィールドワークの方法論に含まれているものとして主張し難いが、これが人類学者の研究過程である資料収集においてどのような機能を果たすのかという問題は、まったく度外視できない部分でもある。インタビューの対価として住民に払われる現金が住民たちの生活にどのような形態であっても影響を及ぼすことは当然あることであって、住民から助けられた人類学者が渡す贈り物として、医薬品もそういう影響を及ぼすことはまったく疑わしくない。贈り物の種類とそれが及ぼす影響が人類学者の言行と直接つながる問題であるため、本稿は野研過程にある人類学者の私的領域について、その考察において贈り物が持つ問題を集中的に分析してみることにする。参与観察の元祖であるマリノフスキーがトロブリアンドで行った贈与と行為を、泉靖一が北満洲のオロチョン社会で行ったことと比較してみることで、人類学者の贈り物と関わる私的遭遇の問題を方法論の次元から考慮してみる契機を作ってみることが本稿作成の具体的な目的である。

マリノフスキーが作成した 1914-1915 年と 1917-1918 年の間の日記には、彼が住民に一種の tipping の形態として提供した贈り物は主に tobacco と一貫しており、tobacco 以外のベテルナッツ (betel-nut) や菓子も含まれる。トロブリアンドの一地域であるモツ (Motu) では tobacco をクク (kuku) という [Malinowski, 1967: 309]。当時、tobacco はいくつかの物を tin や can に入れて販売したが、tobacco 一個は長さが 3 インチ程度で幅は 1 インチ程度の直四角形の棒の形となっている。ちょうど半分個程度の量がパイプに入る量で、tobacco 用紙に巻いて吸う (rolly-cigarette) に適当な量である。半分個を指で潰してパイプに押さえて入れる方式である²⁾。マリノフス

キーが tobacco を贈り物として提供する状況を事例別に整理すると下記のとおりである。

マリノフスキーはオマラカナ (Omarakana) の大酋長トゥルワ (To'u-luwa) に一日半分個の tobacco を提供し、時々ベテルナッツを一束ずつプレゼントした [Malinowski, [1935] 1965: I, 41]。マイル (Mailu) で核心情報提供者の一人であるカバカ (Kavaka) に何個かの tobacco を渡した [Malinowski, 1967: 30]。たまには、tobacco を分けてあげたり、オロウ (*oro'u* = large double canoe) を一台借りたり [Malinowski, 1967: 59]、オロウを借りるのに 20 個の tobacco を要求する住民に対しては取引を中止して [Malinowski, 1967: 65] 怒り出したりもした。なお彼は bara (Mailu 地域の踊り) を見るため、半分個の (*half-sticks*) の tobacco を渡して、踊る人たちにもいくつかの tobacco を上げるが、彼らは皆すぐにその場を離れてしまった。それでマリノフスキーは彼らを「滅種させたい」ぐらい嫌がる [Malinowski, 1967: 69] ことも起こった。マイルから船に乗って隣の島に行ってくる苦勞の対価として 6 個の tobacco を与えたが、もっと要求するピカナ (Pikana) にマリノフスキーは怒り出した [Malinowski, 1967: 70]。インタビューをした対価として半分個の tobacco を渡し、その過程は場合によってはとても満足する [Malinowski, 1967: 71] 時もあった。ルグミ (*lugumi* = オロウのようなもの) の写真を撮るために一束の tobacco を持って村に入ったりして [Malinowski, 1967: 72]、海辺でテント設置を手伝った警察官であるボメラ (Bomera) と何人かの少年達に三個の tobacco をあげた [Malinowski, 1967: 150]。

マリノフスキーは具体的に計算をした上で tobacco を分け与えた点が指摘できる。半分を配るとか、自分を助けてくれた人の作業の種類によって差異のある量を提供したのである。彼は tobacco とこれらの量を認識した。その贈り物効果についての具体的な計算をしていることを表現していた。tobacco の提供より現金 2 パウンドを提供することが資料収集において一層効率的だったという後悔の文章も残している [Malinowski, 1967: 69]。再び訪問するキリウィナ (Kiriwina) とオマラカナのことを思いながら興奮気味のマリノ

フスキーはオマラカナで特に tobacco に関わる行為をどのようにするのかについて計画を立てた [Malinowski, 1967: 290]。リッチ (Rich、他の白人?) はこの村で tobacco を渡し、豚を受け取ったという日記の内容もある [Malinowski, 1967: 52]。

tobacco の交換価値について十分熟知していたマリノフスキーは資料の効率的収集と贈り物の関係について具体的に計算をしていたことがよく示されている。つまり、マリノフスキーの tobacco はトロブリアンドでの民族誌的資料収集方法について具体的に寄与しており、tobacco の交換価値に対する具体的な認識が研究者と研究対象の間で働いていることを指摘することができる。それは人情による贈り物というより、それ自体が一種の政治的過程だったと理解することが妥当であると思われる。マリノフスキーとトロブリアンドの人々の間の贈与論について論じうる tobacco は、人類学者の資料収集において必需品の役割を果たしたと思われる。むろん、その役割に動員されていたのは、当時の状況が提供する条件によって tobacco になりうるし、ベテルナッツや菓子になりうるし、しかも現金にもなりうる。両者の互惠関係を介入する人類学者の贈り物は、モースの贈与論という脈絡から分析される点を十分に包含している。

3.2 泉靖一と阿片

泉靖一に「満 20 歳になる 1936 年は…… (人生の) 転換期として、その年の 1 月朝鮮濟州島の漢拏山で遭難し友達……を失い、それが動機になって国文学から文化人類学の方に転科し、その年の夏に指導を受けた秋葉隆先生の支援をうけ満洲国、つまり今の中国東北地区の大興安嶺に漂泊生活をするオロチョン族の調査を始めた」[泉, 1969: 14]。彼が人類学に入門してから、指導教授の秋葉隆 (京城帝国大学法文学部社会学講座担任教授) から最初に読書を勧められた民族誌がマリノフスキーの *Argonauts of the Western Pacific* [Malinowski, 1922] であって、それによる影響は彼が最初に作成した民族誌的報告書であるオロチョン関連論文に「彼等の生活に同化する」[泉, 1937: 44] という表現として整理されたようだ。

関東軍の傘下の興安東警備軍の工作舞台を背景とした工作員である吉岡義人の引導により実施された資料収集の過程に参加した泉靖一は、自分のオロチョンの踏査やマリノフスキーのトロブリアンド研究中の同化努力をオロチョン社会に対する自らの同化として錯覚する経験をしたものと考えられる。国境地域の軍隊の軍事工作という舞台で行われる泉の調査活動は対民工作の延長線上のことだけであって、民と対している物理的で心理的な状況は同化を取り上げて議論できるようなものでは決してない。

泉がオロチョンに入って活動した期間は1936年7月の1ヶ月間だった。7月2日に奉天を出発し、3日の夜、博克図に到着、4日に司令部の曾根崎参謀長を訪問して、学校（京城帝国大学）から届いた電報を見た。7日午後2時、馬車で博克図を出発して午後9時過ぎにコントラに着いた。8日からオロチョン族たちを訪問した。19日参考品を全て発送準備し、21日機関車に乗って博克図の方に直行した。22日シャマンを訪問し、23日に写真現像のために満洲里へ行った。24日満洲里へ着いた後、国境を見学した。27日、満洲里から博克図に戻ってきた。29日博克図を離れ、30日哈爾賓について一泊し、31日博物館を見学して、民族学者であるポソノフ氏に会った。8月1日、奉天に着いた〔泉、1937：100-102〕。彼が人類学という新たな学問に入門して長くても半年にもなっていない³⁾状態から行われた一種の実習だったと考えられるが、彼がオロチョン住民たちと一緒に過ごした期間は2週間にもならないものと計算される。

泉がオロチョン族の住居地である大興安嶺の博克図のコントラ地域を訪問する時、持っていった土産は驚くことに阿片であった。「調査に際して彼等に親しむ事は大切であるが、そこまで行けなくても、彼等に或る程度まで接近しなくてはならぬ。特に参考品の採集を目的とする時には殊更さうである。即ちそのためには彼等の生活に同化すると同時に、若干の物質的な土産も必要である。併し長い旅故重量が重く嵩張るものはいけない。小さくて軽く、而も彼等の最も要望するものでなければならぬ。それには阿片が最もよい。私は曾根崎参謀長の御好意により、約十二両（百二十モツメイ）の阿片を携行して、七両程を消費した。無茶苦茶に之を振り撒く事は後後の事を

考へると、悪結果を招來する恐れあるけれども、苦しい労働や長い質問の後には阿片を與へると、にっこり子供のやうに笑ふ彼等の鬚面は今以て忘れられない」[泉, 1937: 44-45]。彼の功勞によって、現在ソウル大学の博物館ではオロチョンの資料が保管されている。その資料は泉がオロチョンの人々に阿片を与えた対価として確保されたものであることを指摘する必要がある。

満洲国は阿片吸煙の漸禁政策と阿片専売制を採用し、1932年11月阿片法を公布して、この法は1933年1月に施行された⁴⁾。「1933年の熱河作戦は関東軍の阿片獲得作戦」[藤瀬, 1992: 14]であり、「阿片専賣利益金は満洲国政府の重要財源」[藤瀬, 1992: 18]であった。専売機構は中央(新京)に専売公署、地方に専売署・分署が設置された。私は、当時日本帝国の臣民として阿片を所持して他人に阿片を伝え与える行為についての実定法上の問題を挙げる資格はない⁵⁾。しかしそれが内包している倫理的問題が人類学的方法論として繋がる私的遭遇と贈り物の状況からどのように評価されるべきかについての問題を提起したい。

オロチョンの阿片使用についてはオロチョンを調査した色々な研究者たちにより共通して報告されている。1935年オロチョン地域を一番先に訪れた秋葉隆は「……阿片に関する資料は主に吉岡義人君の調査」[赤松・秋葉, 1941: 102]に頼ると陳述し、「漠河オロチョンの一部から獲得した馴鹿オロチョンの支出表は1941年10月から1942年6月まで」[今西・伴, 1948: 54]の状況を示しながら、「阿片は生理的問題も経済的問題も提起している」[今西・伴, 1948: 57]と伝える⁶⁾。1942年12月19日当地へ出発した大山彦一(満洲建国大学教授)の報告は「父母長男次男女として構成された一家五人の生活平均から見ると、一ヶ月120円程度の収入の中で阿片代が過半」[大山, 1943: 2]と言及している。

秋林洋行が鄂倫春に提供した供給品(1937年4月-5月)35種 5,534.38圓分の中で阿片140両の価格は642.25圓である[永田, 1939: 93-94の表]。この時の供給品には相当数の正月用が含まれており、日ごろの供給品よりは量が多いという点が分かる。35種の中で阿片価格よりも多く払われた品目としては麵(三號、126袋、680.40圓)と栗(19,869個、1,192.16

圓) 2種類しかない。しかも、供給された火薬の総額と阿片の総額が同等の値で、阿片に使われるお金の量がどれくらい大きいものであるかが分かる。総供給された物資の価格における阿片の価格が示す比率は 11.5% である。阿片の価格は 1 両当り 4.59 圓として計算された。即ち、泉が持参した阿片 12 量の価格は大体 55.2 圓の価値になる訳で、彼はこの中から 35 圓の値である 7 両をオロチョン住民たちに配ったことになる。

関東軍の幹部から渡された 12 両の阿片の中、オロチョンの人々に配った残りの 5 両については言及してない。彼は阿片を分ち合う過程については具体的な記録を残してなかった。問題は泉自身が阿片の「生理的問題」について恐怖を感じたのにも関わらず、オロチョンの人々に阿片を配ったという点である。トロブリアンドの人々が好んだ tobacco とオロチョンの人々が好んだ阿片が、住民たちに提供された人類学者の贈り物という点では同一の脈絡で考慮されるが、マリノフスキーが tobacco を提供する際に考慮した点と、泉が心配していたオロチョンの人々の生理的な点は次元が異なる問題である。

齋齋哈爾特務機関長であった松室孝郎大佐による 1934 年の調査と、参謀司調査課が実施した 1938 年の調査期間の間である 1936 年に、泉の調査が行われた。

「20 年前 (1929 年) シロコゴロフの人口統計 4,111 と比べて約 1,100 (名) が減少されて、5 年前 (1934 年) 齋齋哈爾特務機関の調査と比較すると、当時より 700 (名) の減少を示す」[永田, 1939: 16-19] (傍点筆者追加)。もちろん、泉自身もそのような問題に対する「恐怖感」を自分の報告文の中で吐露している点も想起すべきであり、今西錦司が指摘したオロチョン族の生理的問題と阿片との関連性も共に考慮される部分である。関東軍が軍事作戦の次元で使った阿片が人類学者の野研の過程で、民に対する贈り物として使われることは果たして想像がつくことだろうか。関東軍から阿片を提供されて、それを関東軍の工作対象であるオロチョン族に分配した人類学者は関東軍の手下の役割を果たしたのではないだろうか。特務機関、参謀司、人類学者の間での関係関係は否定できない姿を見せており、その程度が

どのようなものだったのかについてはこれから具体的に資料の発掘と分析を要する部分として残っている。

学問の倫理問題はここで止まらない。破倫は泉の私的領域だけに限らないということを指摘しないと、植民地／戦争人類学と倫理問題の関連性に対する論議の場を確保できなくなる。京城帝国大学の学生であった泉が関東軍の下の興安東警備軍の参謀長曾根崎小校から阿片を受け、京城帝国大学民俗参考品室のための参考品収集と民族誌的質問と観察に対する対価として阿片をオロチョン族に配った行為を、個人の偶然の過ち、または私的行為に限られたこととして説明するようになると、植民地統治や戦争期のシステム作動と人類学という学問の連関性に対する嫌疑論証は資格喪失とともに隠蔽帮助の水準に止まることになる。オロチョンと泉の出会いである私的遭遇の贈り物として登場した阿片の分配行為に関わる共犯と時代性を追跡しないと、植民地／戦争システムの作動を証明することにおいて失敗することになる。

泉の論文は指導教官である秋葉隆により、「一一添削」されたと泉は述べているが⁷⁾、この論文の出版のための編集責任は少なくとも、当時の東京所在の日本民族学会の「編集者 古野清人」にあるということを想起すると、最低限、彼らはみんな破倫の共犯であることを指摘することができる。これは破論だという点が問題として認識されていなかった時代的背景が読める。植民地／戦争システムの中心と周辺が帝国権力の脈絡の中で一糸不乱に動いていた当時、学界の画一性と軍一学複合の構図は指摘されるべきである。

しかも、著者である泉は人類学という学問に入門して半年もたっていない学部学生の身分だったことを確認すると、当時、学界の倫理問題に対する無感覚、あるいは無視性を指摘することができる。論文批判において基盤となるべき「時代精神の重圧」[服部, 1974] はどのように適用されるべきか。植民地／戦争人類学の脱倫理 (ethic-free) が当時の時代精神だったと言うと言い過ぎの表現だろうか。脱倫理が破倫の共犯を生んだ時代精神であり、脱倫理の時代精神の重圧が泉をしてオロチョンに阿片を分け与えさせ、そのような内容を自分の報告文に述べさせたのであり、その内容が私的領域を超えた出版という公的領域に登場させるように協力した帝国大学の指導教官と学

会編集者の役割の添加を助長したこととして理解できる。

国境に散在している少数民族であるオロチョン族と彼らの生きざまを観察するために訪問した人類学者と彼を引導した特務機関員との間の関係は、政治的に垂直的位階関係に置かれていたと十分言及できる。オロチョンは関東軍の工作対象であった点が位階性の核心である。人類学者はその位階性に相乗したのである。阿片が持っている生理的問題に対する恐怖心を心配しながらも阿片を贈り物として提供する若い人類学者の立場を隠蔽された偽計で説明することはできない。その位階は時代的重圧の中に包含され作動したものであって泉のレベルで企てた位階ではないという点から、我々は植民地／戦争人類学の背後で作動したシステムの問題を考慮することになる。当時作動したシステムの偽計対象はオロチョンだけではなく、人類学者も包含された点を指摘しなければならない。オロチョンを調査した人類学者は関東軍が造成しておいたオロチョンとの垂直的位階に相乗りする対価として関東軍の隠蔽された偽計の罠にかかった点を指摘することができる。

泉のオロチョン研究に関する報告文は同一の内容が時間を置いて3回出版された。最初は1937年『民族学研究』3巻1号に載り、2回目は1969年出版された泉の著書『フィールドワークの記録——文化人類学の実践』に掲載され、3回目は泉が死亡した後である1972年に出版された『泉靖一著作集』に収録されたものである〔泉靖一, 1937, 1969, 1972〕。上の三つの文書を比べてみると、1969年のものと1972年のものは全く同一の内容であることが分かる。即ち、1972年のものは著作集の編集者達により、単純に転載されたものである⁸⁾。従って、内容上の差が出る部分についての比較は1937年のものと1969年のものに限り意味を見出すことができる。

「私は曾根崎参謀長の御好意により、約十二両（百二十モツメイ）の阿片を携行して、七両程を消費した。無茶苦茶に之を振り撒く事は後々の事を考へると、悪結果を招来する怖れあるけれども、苦しい労働や長い質問の後に阿片を與へると、にっこり子供のやうに笑ふ彼等の鬚面は今以て忘れられない」〔泉, 1937: 44-45〕という1937年の記録は1969年の著書の中で発見されない。この部分だけでなく阿片と関わる幾つかの内容は組織的に削除さ

れた状態で、1937年の報告文は1969年の著書の中に場所変更をした。国家権力が作動した1937年の京城帝国大学の学生が残した記録は30年くらい後、東京大学の文化人類学研究室の教授により、「ここに述べたものは『京城日報』と『民族学研究』にある調査報告」[泉, 1969: 14]という修辭の追加と共に著者権力の職権によって、削除される姿を見る。1937年の「忘れられない」という対象が1969年には「必然的に忘れるべきこと」となってしまった。記録という手段を通して記録を削除する過程が発生した。

オロチョンの阿片と関わる記録の削除から30年くらい過ぎた今、60年くらい前の最初の記録と30年くらい前の削除過程について言及されることはごくまれである [小川, 1996: 61]⁹⁾。オロチョンの阿片と関わる泉の記憶は泉と共に埋められた。しかし、1937年の記録は1969年の削除の試みにも関わらず、厳然と現存している。泉の死後、編纂された1972年の著作集から削除の試みは自動的に延長されたが、原記録はよく保存されている。記憶よりは記録の発掘と分析に忠実でなければならない作業が人類学史の重要な部分であることが分かる。このような部分について学問の倫理問題上の責任ある発言をすることが後学たちに残された課題だろう。

4 ティブのハムレットとパラオの天皇

4.1 ボハナンとハムレット

クリフォード・ギアツは人類学者の野研を学習過程 (learning process) と言った。即ち、人類学者が現地の文化を理解するために研究する過程は、その社会の子どもが大人になっていく過程の学習にも類似したものと認識したのである。文化が異なるため、学んで理解しないといけない対象として選定された社会の中で作業をする人類学者は、異なる文化を学ぶ過程で、自分のアイデンティティーを損傷される経験をするようになる。文化が相対的であることは、研究対象である文化を見る人類学者の立場と、現地の住民が人類学者自身が保持している文化を見る立場を全て含むこととなる。それゆえ、野研は学習過程だけでなく、学習過程が含まれた教育が本質的に内包し

ている双方性に依存する。人類学者が住民から教わることもある反面、住民が人類学者から教わる場合もあるはずである。

1960年代、初めて西アフリカのティブ（Tiv）族を研究する過程で経験したローラ・ボハナン（Laura Bohannon）のエピソードはシェイクスピアのハムレット（Hamlet）に登場する幽霊（ghost）をどのように理解するのかという問題を提起した。「野研の過程は常に人類学者として自分のアイデンティティー意識（sense of self-identity）を損傷させる攻撃を受ける。なぜかという、最低限の短い期間であっても、人類学者は自分の地元と連結される絶えざる同一化過程と自分の一体感を緊密に維持させてくれる重要な他者たちの喪失状態に置かれるためである」[Wengle, 1988: 153]（傍点筆者追加）。このような理由によって現地に長期居住をする間、人類学者は少なくとも数々の小説を持参していくことが多い。マリノフスキーの日記の中でも幾つかの小説の名が登場する。それは一人ぼっちで生きる人類学者自身のアイデンティティーの問題とも関連するものである。

ボハナンの場合もティブでの生活に適応する一つの方法としてシェイクスピアの作品を持参し、時間が許す場合には自分の部屋でその作品を読んだ。彼女が読書三昧に嵌った姿を見たティブの長老たちがボハナンが読む本の内容について関心を示したので、ボハナンはハムレット王子と毒殺されたハムレット王子の父親についての部分を話した。ボハナンはティブ文化を理解し、自分が理解したティブ文化を英語で翻訳する過程の民族誌作業をしていた。しかし、逆にボハナンは英語文化をティブの人々に翻訳しないとイケない課題が生じたわけだ。ボハナンはこの過程を通してティブ人の魔術（witchcraft）に関する理解を一層深めることができた。

ボハナンは毒殺された王の幽霊が登場する場面を説明するが、ティブ人には幽霊という概念が存在しないため、新たな経験をできるようになる。ボハナンとティブ人は概念真空の経験を共有しながら文化理解の限界に逢着する。ボハナンはなんとか幽霊を死影と説明を試みるが、それもティブ人には理解できなかった。結局、ハムレットに登場する幽霊現象がティブ人の認識体系の中に入っている概念である魔術現象として理解される過程を経験するよう

になる。長老たちとボハナンの間につくられた権力関係により西洋文化はタイプ文化によって「オリエンタライズ」される経験をするようになり、西アフリカのタイプでシェイクスピアは新しく脚色されざるを得ないことに気がついた。文化理解の過程は必然的に誤解の属性を互いに内包するしかないものという点と、理解と誤解は常にペアーとして存在するということを指摘することができる。

タイプの長老たちはボハナンがイギリス文化をよく理解していない状態でタイプを訪問したものだと思告しながら、「君が君の国の文化について私達に話すと、その文化の意味を私達がうまく説明してあげられる。だから君の国に戻れば、長老たちに私達が生きるタイプという地が何も学ぶことのない荒地ではなく、君に智慧を教える人々が生きるところだと伝えて欲しい」[Bohannan, 1966]と頼んだ。文化相対性が確保された脈絡の中で双方から周辺化された人類学者の姿を読むことが出来る。

4.2 杉浦健一と天皇

第一次世界大戦後、日本が獲得した信託統治領であるパラオ島に南洋庁が設立され、南洋庁が管轄する地域に対する人類学的研究が何回か行われた。そのような過程で杉浦健一は「南洋」の地域専門家として認められるようになった。彼は1934年から1936年の間には『人類学雑誌』に、1937年から1939年の間には『民族学研究』に集中的に書評を寄稿した。彼は当時日本の人類学と民族学の業界で、西洋で出版された書籍に最も多く接した人である。言い換えると、杉浦健一ほど西洋人類学及び民族学の理論に詳しい人はいなかったと言えるだろう。

本稿から杉浦健一と彼の経験事例を扱うのは2つの理由からである。1つは彼が当時の人類学者の中で誰よりも人類学分野の理論武装が良くできていた人だということである。人類学の基礎的素養とも言える文化相対性についての彼の認識を試すことができる。もう1つは彼の経験事例が筆者が意図する私的遭遇の領域の中に入ってくるメタ民族誌に属すると思われるためである。彼は1938年9月ヤップ島についての資料収集過程にあって、その過程

で起こったエピソードはボハナンが西アフリカのティブから経験したものと類似した面も持っている。杉浦のエピソードは次のとおりである。

「(1938年)九月五日より五日間オカオ村に滞在す。食事は毎日オカオ村酋長モムタム自身が作ってくれる。彼は日本の最初の公學校生徒として教育を受けたことを誇りとしている。片言ながら日本語も通ず。(中略)一タムタムはワイと云ふ私有物を入れる手さげの中から主婦の友(雑誌の名は確かでない)の皇太子殿下御生誕紀念の皇室御寫眞帖をうやゝしく取り出して説明してくれと云ふ。昨年の夏パラオに於て島民等は皇室の尊崇すべきを充分に知りながら理解が充分でないため筆者に不快の感を與へたことも尠くなかつたので丁寧な説明をした。先づ第一に陛下は唯だ大きな権力者でなくして現人神にましますことをヤツプの神話をも引用して説明した。以下日本の國體に關する話をも一應解してくれたことは嬉しかつた。もとより御稜威の邊土の蠻民にまで及んだ結果と云ひながら、民族學が皇室の御尊嚴を明かにするのに役立つことは喜ばしいことであつた。モムタムは筆者から聞いた話は直ちに妻や琅にやさしく説明してやつた。ヤツプに於ては人前で妻や琅にやさしく話をしてゐる有様は見たことがない。」[杉浦, 1939: 126]。

ボハナンの場合とは異なり、杉浦は自分の本故郷と連結される絶えざる同一化過程と自分の一体感を緊密に維持させる重要な他者の喪失を心配する必要はなかつた。彼は日帝の大東亜共榮圏のモデルと皇国臣民という思想で自分の一体感を強く武装させていたためである。「天皇は絶対、神聖なる現御神であらせられる」[河野, 1942: 145] という皇道主義は人類学者である杉浦のアイデンティティーを強く維持させただけでなく、このイデオロギーは人類学者によって現地の住民たちにうまく注入されていることが分かる。民族學は皇道主義の伝道師の役割を十分果たし、このような役割遂行について杉浦はとても満足した。

杉浦とオカオ村の酋長の間私的遭遇は、殖民母国と植民地という政治的位階關係網が造成された枠の中で、皇道主義の征服的イデオロギーをヤツプ島の神話として説明する過程を含んでいる。二人の間の對話の中における既存の政治的位階關係と「天皇」と関わる主題の一方的注入の中には文化相対

性の立つ場所がない。位階性が相対性に譲りうる物理的／心理的場所は存在しないのである。皇道主義がオカオ村酋長と彼らの社会の位階秩序を通して教育されていることを喜ばしい気持ちで確認する杉浦健一の行為は、植民地統治者のそれとぜんぜん違いはない。彼が真の人類学者だったら、もしくは最小限度の文化相対性という問題意識を確認した人だったら、彼はオカオ村の酋長の説明方式を誘導し、その説明を傾聴して、その理解方式を学習する過程を踏まないとならないのである。杉浦はその反対の方式をとった。意味を無視されたパラオ神話は日本帝国の皇道主義を伝え、教える剥製品の役割をはたしたことになる。日本文化を一方向的にヤップ島の住民に注入させる方式を取ることによって、住民たちは人類学者である杉浦が乗せてきた「皇」爆の被爆者になったわけである。

学習過程に充実していたボハナンの民族誌学者的言行は、杉浦がヤップ島の住民たちに天皇の意味を注入させるために住民たちの神話を利用したものと相当対照的な姿で現れる。ボハナンの言行に対照される杉浦の言行は一種の思想暴力とも言える。住民を対象として侵略的思想のイデオロギー化を試みる人類学者は、実際、学者を誦めたものと等しいだろう。自分が遂行した思想暴力の完成度に対して喜びを感じる杉浦は、自分の言行を照らすことの出来る鏡を持っていなかった。帝国の皇道主義と戦争システムが作動した時代的重圧による偽計された当時の知識人の限界点が読める題目にもなる。彼が同僚と後輩のために作成し出版した書評の背景になったその多くの人類学書籍も、彼自身のための自省的な鏡の役割を果たすことができなかった。彼の皇爆内容が『民族学研究』という日本民族学会の機関誌に掲載されたことは、公式的な編集過程でさえ倫理性の問題に対するフィルター装置をもっていなかったという証拠にもなる。これらが私的領域と公的領域が混在した当時の状況を証言するものであって、杉浦の思想暴力的行為は究極的に私的領域ではなく、公的領域であるシステムの問題である点を確認したといっても過言ではない。帝国の偽計意図を監視し牽制できるポイントはどこにも存在していなかった状況がわかる。植民地／戦争人類学は当時の偽計工作の産物であったと理解できる。

5 「先方法」としての出会い

言行には常に段階という過程がある。段階には前段階がないはずがない。同様に方法については先方法を考慮することができる。人類学者が論じてきた方法ということに対する反省のための過程として先方法を論じてみたい。従来的人类学者が論じてきた方法についての反省がなければ、その方法は全て呪術的な暗示の段階に相当する。反省という先方法を通して暗示は試験されるべきであり、その試験段階を通して呪術的暗示は理性的で合理的知識の過程に進入することが可能である。

方法を考える人類学者はどんな場合でも「対象」として設定された人々との出会いという行為を経ることとなる。人類学者の一番確実な相手としての人々との出会いが方法の前段階を決めることになる。その前までに考えた人類学者の方法というのは最初の出会いによってテストされるわけである。

アルフレッド・クロバー (Alfred Kroeber) 教授を訪ねたカルフォルニア大学 (バークレー) 人類学科の大学院生がインディアンの村に出発する前に助言を求めた。どのようにすれば、野研を効率的に出来るのかという質問であった。クロバーの反応は鉛筆1本とノート1冊を渡す行為だけだったというエピソードがある¹⁰⁾。野研には王道がないという表現だろう。それにも拘らず、人類学方法論では参与観察を論じている。既にギアツにより指摘されたように参与観察というのも曖昧な表現である。住民たちの日常生活に入った人類学者が最初に動員する手段は参与観察ではない。参与観察という方法を可能にさせる条件を具備する作業である。先方法の問題でもある。先ず、自分を紹介し、住民達が自分に対して好感を持つようにすることで住民との接触を容易にしなければならない過程が必要である。その次に参与観察であれ、アンケート調査であれ、写真撮影であれ色々な行動が可能となるわけである。私はこの段階を「出会い」と表現する。

出会いの段階を認識した学者たちは、一貫した意見で rapport の形成 [Griaule, 1957: 8] と有機体的成熟性による rapport の形成 [Mauduit, 1960: 2] を助言したが、それらをどのようにするのかについては一言半句もなかつ

た。マルセル・モース (Marcel Mauss) は観察者と対象間の関係設定の難しさ [Mauss, 1947: 5-6] について指摘し、深化方法 (intensive method) が観察を構成するが、それらは一種の難場 (debrouillage, debrouillement) [Mauss, 1947: 9] とも吐露している。モースも彼の方法論に関する著書から具体的なテクニックに対することばかり言及しているのである。野研の状況で民族誌学者である人間が道具となる観察と学習の問題、即ち私の目と観点と行動と言語が道具にならなければならない部分は全て避けてしまった。そのような忌避が蓄積されたところには呪術的暗示しか作られない。いわゆる貫禄という暗示が誕生したのである。

民族誌方法論の画期的な革命をもたらしたマリノフスキーのトロブリアンド研究は長期居住から始まった参与観察だと評価される。彼のトロブリアンド研究の機会是一种の流配状態で果たされたものである。第一次世界大戦の状況で敵国の出身という身分のため、英国領であるトロブリアンドに居住するしかなかった彼の立場を考えると、マリノフスキーとトロブリアンド人の出会いは当時では前代未聞の研究方法を提供するには十分であった。この出会いはマルセル・モースが指摘したように、観察者と対象者間の関係設定という問題である。

その関係は基本的に信頼であり、両者の信頼関係が人類学の成立を可能にし、この信頼感はどうような状況でも守らなければならないということを指摘している。利敵行為を審判する法廷で自分に不利な結果をもたらす可能性が高い状況でも自分の核心提報者に対する秘密を守る人類学者の姿は亀鑑として十分である。“I am very sorry, Mr. Houston, but I cannot, I simply cannot be an informer on people who, in my judgment, have always been completely loyal to our country, and who do not believe in force and violence, who have never done anything illegal, and who are my friends” (Melville Jacobs Collection, University of Washington Manuscript Collection-120-52) [Price, 1998: 409].

研究者と対象者の間での信頼感、それが維持される限り出会いを守り、この出会いは人類学という学問の倫理の堡壘でもある。それは難場という名で避難できる対象ではなく倫理という範疇のなかで理性的に判断されなけれ

ばならない問題である。その判断は倫理問題の実験舞台の中で行われうる可能性を本稿の論議の過程で発見したと思う。人類学で倫理問題は先方法の段階で既に定められると見なければならぬ。資料蒐集のための具体的な方法に入る前に倫理問題は始まるわけであって、出会いという時点で倫理問題は発生するということが分かる。その出会いを大事に思う人類学者の言行が人類学という学問の倫理性を図る物差しになることは再び言うまでもない。

6 結語：人類学倫理のために

マリノフスキーがトロブリアン人に配ってあげた tobacco と、ボハナンがティブ人と話し合いながら魔術について学びの過程を身に付けることになったシェイクスピアのハムレットを、泉がオロチョン人に分け与えた阿片と、杉浦がヤップ島民に注入した皇道主義と対比し、人類学者たちの私的遭遇から展開される方法論的過程としての贈り物行為と思想交換について議論してみた。薬理的に分析すると、阿片よりも tobacco が致死率を高めるのに一層効果的であるという報告も出ている。そのように見てみると、泉の阿片よりマリノフスキーの tobacco がなお悪質な贈り物だったという評価もできる。マリノフスキー時代の人々は tobacco の害についての認識がなかった。反面、泉が活動した時期には阿片の害についてすでに認識は深く刻まれており、それは相当の政治的問題を伴うこととして理解されていた。自ら泉はそのような恐怖心を持っていながらも、阿片をオロチョン人に配って与えた点について、私的遭遇の状況に置かれた人類学者の倫理問題に照らして、取り上げて議論され得る点を指摘することが本稿の内容である。

本稿で選択した資料の比較方法について問題を提起することができる。人類学の訓練を積んだマリノフスキーと初心者の泉を比べ、1930年代の杉浦と1960年代のボハナンを直接比較することについての問題である。厳密な意味から筆者は比較方法に問題があるとしても、その問題は倫理問題に対する議論のために犠牲にできると思われる。例えば、殺人という主題を扱いながら縄文時代の殺人と現代の殺人にかかわる倫理問題は未来にも取り上げら

れることである。倫理問題というのは普遍性を志向する。人類学の文化相対性を超越するものが倫理である。時間と空間が規定する特殊性を超える形而上学が倫理学である。従って、研究の生命力は倫理問題の普遍性という物差しに照らして時間及び空間的にどれくらい広く拡散できるのかで判断されると言えるだろう。

日本で植民地主義と人類学に関する研究はかなり進んでいる [Van Bremen & Shimizu eds., 1999；中生編, 2000；山路・田中, 2002]。ほとんどの研究結果は当時のシステムに関する問題を挙げている。いわゆる巨視的な眼識で当時の支配と統治次元に動員された人類学の役割について議論している。本稿は既存の巨視的な研究とは異なる微視的な眼識で、植民地／戦争人類学の問題を倫理的な次元から挙げられる資料を提示し、研究方法上、問題になる私的遭遇について集中的な分析を試みた。泉の「阿片」はオロチョンの人々の体を支配し、杉浦の「天皇」はヤップ島民の心を支配した。学問の人に対する支配様式とヘゲモニーの方向がどのように展開されるのかという過程を見せてくれる事例であることが分かる。当時の学問システムは私的領域の倫理問題を検証し統制する機能もなかった。それはむしろ関心対象の領域外に存在するものであったと表現する方が一層正確かもしれない。このような状況の偽計性に関する問題はシステムの次元で論議されるほかない。

杉浦は1929年4月5日から11日までソビエト政府の援助でレニングラードで開かれた民族学大会 (Konferenz der Ethnologen) を紹介しながら、それはレニングラードとモスクワにいる民族学者たちではなく、ソビエト政府の国立唯物文化史学院が準備したもので、ソビエト政府の御用学として開かれたと評価する¹¹⁾。この大会に対する杉浦の最後のコメントは「革命を弁護する御用学問と思わせざるを得ない」 [杉浦, 1933: 17] という事だった。19世紀末から始まった植民地侵略と満洲事変 (杉浦の文章が発表された時点に限る場合) を通して、日本での人類学は「戦争を弁護する御用学問と思わせざるを得ない」状況が展開されたのではないのか。ソビエトの革命は見え、日帝の戦争は見えなかったわけである。他人は見えても、自分を顧みないことが人情の常であるか。人類学は「人間のための鏡」 (Clyde Kluck-

hohn) とも言った。その鏡は自分を照らすことが出来るのにも関わらず、自分の姿を見ない（または見たくない）人類学をやってきたのが日本の植民地／戦争人類学だった点を確認することができる。

「民族学の使命というのは民族及び種族生活の基礎構造を究明することで、……民族学は種族及び民族の相違性の立場から観察して政治についての参考資料を提供するだけで、それ以上をすることは度がすぎることとなる」[鹿野, 1946: 1-2] という発言は、植民地／戦争人類学のシステムの中で位置づける場合はほとんど有一の例外だった。鹿野忠雄博士が大東亜共栄圏と皇道主義のために奉公した同僚学者たちに向って残した最後の声は、敗戦とともに北ボルネオで行方不明になるという不運へと至った。今、学問の倫理問題を論じている我々に重要なことは、日本の植民地／戦争人類学の血統は悲惨な遺産を抱えて歴史の中を生きているという点を確認することである。

教えるという行為に含まれる象徴性には権力関係が内包されている。教えるを与える人とそれを与えられる人の間に作られる取引関係が垂直的な位階関係である優者と劣者（underdog）の状況に置かれることが一般の現象である。人類学者が野研のため現地に入って現地の文化を学ぶ過程で発生しうる状況を、教えることと関わる位階関係の構図の中に設定すると、現地にいる人類学者は特殊な状況の劣者の地位に置かれることが基本的構図と思われる（ボハナンの場合のように）。しかし、植民地／戦争の状況で形成される大部分の野研から展開されることのように、外部の専門機関から派遣される調査者の身分として現地に登場する人類学者が作り出した雰囲気はほとんど全て反対の場合である。これらは人類学的方法論としての野研の哲学にとって致命的問題となる。野研の過程を学習と規定することと、調査と規定することの間に、現存する一つの現実的な問題が人類学という学問全般に関わっていることを指摘しなければならないことになる。なぜなら、調査者と被調査者の間に成立する権力関係を別としても、垂直的位階関係から導出できる資料の客観性の問題があるからである。

学問の科学性確保の問題は過程の客観性の程度にかかっている。化学実験

室では絶えざる施行錯誤の過程を踏む。最適の工程過程を明らかにし、その過程を証明するためには多くの実験が反復される。期待される資料を得るため必要な試薬の投入量を調整し、時間を測定して結果を総合するが、その過程における投入量と時間などの変数を少しずつ変えながら実験過程を蓄積する。最終的に立証された結果が生成される過程を整理することが、論文を作成し、適切な方法論を立てる作業である。その次にもっとも重要なことは、他人が同じような方法を繰り返した時、同一の結果が生まれることが認められる時、前者の研究は研究として認められる。従って、過程の客観性を認めるために私達は方法論という問題について没頭するようになり、学問の大部分の時間を方法論との戦いで過ごすこととなる。

社会科学的方法論上の客観性の問題は未だに宿題として残っているのが現実である。人を対象とする研究過程が化学実験室のそれと同一の次元を確保することが難しいのは認められた事実であるため、この議論は最後を結ぶことができないのが事実である。価値介入と没価値性に関する議論、そして価値介入によるリアリティーの認識問題が相対的に疎外されている点も事実として認めるしかない。人間社会の研究のために具体的な方法論の開発についての努力と比べて、方法論上、介入可能な価値の問題とその結果がもたらす倫理の問題について相対的に疎かなことも学界の現実でもある。

方法論を論じながら末尾に部分的に挙げられる、学問と学者の倫理問題について、方法論に関する議論の第一章で一番深刻に議論されるという雰囲気をつくり出すことが、人類学を再発明し得る基礎となり得る。なぜなら、人類学が実証的な学問として存在する理由を確認するには、倫理性の試験台としての理性的認識に基づくものであり、その出発は野研と私的遭遇の生産物であるメタ民族誌で検証が可能であることを指摘することができる。植民地／戦争人類学の方法論に介入された倫理問題はまだまだもな評価と批判の手続きを踏んでいなかった。この手続きは人類学史の必然的な過程であり、その過程は人類学の倫理の基礎となる自省の鏡を提供することができるだろう。

注

- 1) 清野謙次は自ら「病理学者としての私に人類学は道楽である……私は最初、人類学の中から古人種の体質特に、古人種の……骨格と共に……遺跡地を発掘するようになり……」[清野, 1930: 82] (傍点筆者追加) と述べている。彼は人類学を本業ではなく道楽としていることを自ら告白する。
- 2) その tobacco を所謂 compressed tobacco ともいうが、これらを売る商店は tobacconist ともいった。
- 3) 泉靖一は、1934年4月予科から本科に進学し、その年の7月濟州島のハンラ山に登山した [飯山, 1972: 6-8 参照]。1936年1月ハンラ山の登山の時、遭難事故にあい、共に行った友達が死亡した後大学の専攻を国文学から社会学に転科した [泉貴美子, 1972: 32]。彼が社会学に転科した時点は1936年4月だと思われる。遭難事故直後である1月から転科のために秋葉隆教授に会ったと仮定すると、オロチョン踏査時を基点として彼が人類学入門期間は6ヶ月程度になる。仮にその年の4月からとすれば、彼の人類学入門期間は3ヶ月にしかならないことがわかる。
- 4) 「東京裁判判決文『B部第五章 日本の中國にたいする侵略』」の3箇所に阿片に関する事項が出てくる。特に、日本の政策意図に関して「売買は軍事行動と政治的發展と関わっていた。この売買により日本側によって設置された色々な地方政権のために資金の大部分を得られた。……興亜院が管掌する各種事項の中に阿片がある。興亜院は中国の各地方で阿片の需要状態を研究し、蒙古から華北、華中そして華南の方に阿片の配給を任せられた。」[江口, 1988: 7]。
- 5) 日本の刑法(第135条-第141条)に明示された「阿片煙に関する罪」の中で第140条は「あへん煙等所持」に関する問題を指摘している。この刑法は明治40年(1907年)に制定され、1995年までその内容が少しずつ改定されたが、基本の骨格はそのまま維持されている。従って、泉が1936年当時、日本帝国の臣民として満洲国で阿片を所持した行為についてどのように考えるべきかという問題を提起することもできる。
- 6) 「泉靖一が大興安嶺東南部オロチョン族の踏査報告をした1936年頃の状況より現在は当局の指導と思索により多少改善されたようだ」[今西・伴, 1948: 61, 註36] という報告があるが、「馬オロチョンでは悲惨な状況である。一つの例として中部大興安嶺の馬オロチョンからみると、25歳以上の大人男女138名の中、阿片常習者は83名(つまり60%)に至り、高価の阿片を得るために交易傘下の大部分をその費用として使う。この阿片は40年ぐらいい前、清朝末期に森林伐採の働きをしていた中国人苦力が持ってきたものだ。医療設備と薬剤がまったくない所から内外の傷病の苦痛を和らげる有一の鎮定剤として狩猟生活の難しさを忘却させるものとして、馬オロチョンの狩猟社会から切り離し難い存在となった。馬オロチョンでは中国人と共に喫煙することではなく、生阿

片をそのまま食べるが、肉体的には悪影響を割と少なく与えると。……問題は馬オロチョンでは阿片は生理的問題や経済的問題も提起されていることとなる。阿片が高価であるため、一般に手に入れることは極めて難しい。このような事情を利用した中国商人の悪辣な搾取が行われている。……特に満洲建国以来、阿片の禁令が表面上徹底され不良交易者の暗躍を促進させ、それによって馬オロチョンはその支払いのほとんどを阿片に入れざるを得ない状況である。彼らの有一の財産である馬匹を失われる場合もある。阿片によって生活が極度に貧しくなり、阿片に対する強い欲求は馬オロチョンに牛馬の窃盗を起させたりもする」〔今西・伴，1948：57〕。

- 7) 「小報告は全く秋葉先生の御指導の下に行はれ殊に私の疎雑な原稿を一一添削された」〔泉，1937：42〕。
- 8) 1972年に刊行された著作集である「編者あとがき」の「本巻に載った論文とエッセイ」（出典は次の通り。〔佐藤，1972：426〕）で1937年1月に発行された『大興安嶺東南部オロチョン族踏査報告，民族学研究 3(1)：39-106』に言及し、1969年5月に刊行された『フィールドワークの記録——文化人類学の実践（東京：講談社）』に言及してないため、著作集に掲載された大興安嶺のオロチョン関係の文章が編者によって一部改作されたのかという疑問が提起されることが出来る。『民族学研究』3巻1号に載った論文（1937. 1.）と1969年5月に発行された単行本著書の中で『オロチョン族踏査報告』（pp. 45-107）、そして著作集に載った3つの台本を比較してみた結果、著作集の内容は1969年のものと一致する。従って、著作集の編者が1969年の単行本から転載する時に、出典を紹介しておけば不用な誤解は生じなかったと思われる。著作集を製作する過程では原文の改作がなかったこととして判断され、改作は原著者である泉教授自身によって1969年に行われたことが分かる。
- 9) 小川伸彦〔1996〕の報告はその削除過程について指摘している。小川の指摘は、一般的に接しにくい報告書に収録されている。
- 10) クローバーの指導学生であった故ロバート・スペンサー（Robert Spencer）教授の話（1979年の秋の学期 University of Minnesota 人類学科の「人類学史」セミナーから）。
- 11) ヴィルヘルム・コッパース（Wilhelm Koppers）が *Anthropos* 27：501-523 に報告した論文「ソビエト政府治下の民族学の運命」（Das Schicksal der Ethnologie unter dem Sowjet-Regime）を読んで紹介したものである〔杉浦，1933：17〕。杉浦の文章は開催日時を書き間違えている。杉浦の文章は8月と紹介しているが、8月ではなく4月である〔Koppers, 1929：501〕。

文献

赤松智城・秋葉隆，1941，『満蒙の民族と宗教』東京：大阪屋書店。

- Boas, Franz, 1919, "Scientists as Spies," *The Nation* 109(#2842) : 797.
- Bohannon, Laura, 1966, "Shakespeare in the Bush," *Natural History* 75(7) : 28-33.
- Brymann, Alan, 2001 "Introduction : A Review of Ethnography," *Ethnography* (1), London : Sage, ix-xxxix.
- 全京秀, 2001, 「マリノフスキーの文化理論——脈絡論から機能論へ」『韓国文化人類学』34(1) : 3-27.
- 江口圭一, 1988, 『日中アヘン戦争』東京 : 岩波書店.
- 藤瀬一哉, 1992, 『昭和陸軍「阿片謀略」の大罪／天保銭組はいかに企画・実行したか』東京 : 山手書房新社.
- Geertz, Clifford, 1988, *Works and Lives : The Anthropologist as Author*, Stanford : Stanford University Press.
- Griaule, Marcel, 1957, *Method de l'ethnographie*, Paris : Presses Universitaires de France.
- 服部民夫, 1974, 「刊行の持つ問題点について」『鈴木榮太郎著作集 V <朝鮮農村社会の研究>』東京 : 未来社, 89 : 48-56.
- 土方久功, 1943, 『流木』東京 : 小山書店.
- 飯山達雄, 1972, 「少年時代の靖一君」『泉靖一著作集』第3巻 月報6, 東京 : 読売新聞社, 6-8.
- 今西錦司・伴豊, 1948, 「大興安嶺におけるオロチョンの生態 (二)」民族学研究 13(2) : 42-61.
- 泉貴美子, 1972, 『泉靖一と共に』東京 : 芙蓉書房.
- 泉靖一, 1937, 「大興安嶺東南部オロチョン族踏査報告」『民族学研究』3(1) : 39-106.
- , 1969, 『フィールド・ワークの記録——文化人類学の実践』東京 : 講談社.
- , 1972, 『泉靖一著作集 1』東京 : 読売新聞社.
- 鹿野忠雄, 1946, 『東南亜細亜民族学先史学研究』東京 : 矢島書房.
- 清野謙次, 1930, 「考古隨録 (一)」『歴史と地理』26(4) : 82-87.
- , 1943, 『スマトラ研究』東京 : 河出書房.
- 河野省三, 1942, 『皇道の研究』東京 : 文学社.
- Koppers, Wilhelm, 1929, "Das Schicksal der Ethnologie unter dem Sowjet-Regime," *Anthropos* 27 : 501-523.
- Malinowski, Bronislaw, 1922, *Argonauts of the Western Pacific*, London : George Routledge & Sons.
- , [1935] 1965, *Coral Gardens and Their Magic*. 2 vols, Bloomington : Indiana University Press.
- , 1967, *A Diary in the Strict Sense of the Term*. Trans. Norbert Guterman, Lon-

- don : The Athlone Press.
- Mauduit, J. A., 1960, *Manuel d'ethnographie*, Paris : Payot.
- Mauss, Marcel, 1947, *Maneuil d'ethnographie*, Paris : Payot.
- 永田珍馨, 1939, 『満洲に於ける鄂倫春族の研究 第一篇』奉天：治安部参謀司調査課.
- 中生勝美編, 2000, 『植民地人類学の展望』東京：風響社.
- 小川伸彦, 1996, 「地域研究成立史の一断面——泉靖一と濟州島」筒井清忠編『総合的地域研究 成果報告書シリーズ No. 14 く地域研究成立く』文部省科学研究費補助金重点領域研究「総合的地域研究」総括班, 55-64.
- 大山彦一, 1943, 「オロチョン調査の旅」『建国大学研究院月報』25 : 2-3.
- Price, David, 1998, "Cold War Anthropology : Collaborators and Victims of the National Security State," *Identities* 4(3-4) : 389-430.
- , 2002, "Past Wars, Present Dangers, Future Anthropologies," *Anthropology Today* 18(1) : 3-5.
- Proctor, Robert, 1988, "From Anthropologie to Rassenkunde in the German Anthropological Tradition," George W. Stocking Jr. ed., *Bones, Bodies, Behavior : Essays on Biological Anthropology*, Madison : University of Wisconsin Press, 138-179.
- 佐藤信行, 1972, 「編者あとがき」『泉靖一著作集1 フィールド・ワークの記録(1)』. 東京：読売新聞社, 419-426.
- 杉浦健一, 1933, 「露西亜に於ける最近の民族学の傾向(二)」『民俗学』5(2) : 10-17.
- , 1939, 「ヤツプ島民族調査日誌抄」『民族学研究』5(1) : 124-130.
- Van Bremen, Jan & Shimizu Akitoshi eds., 1999, *Anthropology and Colonialism in Asia and Oceania*, Surrey : Curzon.
- Wengle, John L., 1988, *Ethnographers in the Field : The Psychology of Research*, Tuscaloosa : University of Alabama Press.
- 山路勝彦・田中雅一編, 2002, 『植民地主義と人類学』西宮：関西学院大学出版会.

Opium and Emperor in the Context of Colonialism/Wartime Anthropology : Ethical Issues in Academism

Chun Kyung-Soo*

trs. Yoshiyuki Yama**

Kim Nan Hee**

■Abstract

This paper focuses mainly on ethnographic field research conducted during the period of Japanese imperialism, especially during the period of colonialism and the wartime era. This discussion primarily examines the field experiences of Seiichi Izumi and Kenichi Sugiura. Both became professors of cultural anthropology at the University of Tokyo after World War II. I analyze what they were doing in their fields as researchers, giving special attention to the initial encounters between the anthropologists and the natives they visited during their field research. Izumi brought some opium given to him by the Japanese Army intelligence specialists to the Orochon in the north of Manchuria during the summer of 1936. He was a student of Professor Akiba Takashi (an anthropologist at Keijo Imperial University). His actions can be compared with those of Malinowski, who gave gifts of tobacco to the Trobrianders.

The delivery of opium by a young fieldworker to the Orochon could have served some secret strategic intentions of the Japanese military intelligence at the time, unlike the gift of tobacco given by Malinowski to the Trobrianders. Sugiura was dispatched by the Japanese military to conduct ethnographic field research in the Palau islands in September 1938, after the Japanese military invasion into mainland China. He was displeased with the islanders' inability to understand the significance of the Japanese emperor and the related story of the Great East Asian Co-Prosperity Sphere centered around the emperor. He tried to educate the islanders and to indoctrinate them with the Japanese ideology regarding the emperor and Shintoism rather than using his position as an ethnographer to try to learn about

*Seoul National University

**Kwansei Gakuin University

the Palau islanders' myths. The colonial domination and military invasions of Japan after the 1930's in the Asia-Pacific region had a direct impact on Japanese anthropology in the field. This points to the importance of examining ethical issues in field research conducted by anthropologists and suggests that considerable thought be given to developing a code of ethics in the field of ethnography.

Key words : field research, rapport, colonialism and war in Japanese anthropology, ethics in fieldwork, Seiichi Izumi, Kenichi Sugiura, history of Japanese anthropology